

## イギリス、カナダー私のふれた視覚障害者福祉

日本ライトハウス職業生活訓練センター

主幹 日比野 清

### はじめに

私は1979年10月から12月にかけて、イギリス、カナダにおける研修の機会に恵まれた。本来の目的はカナダのCNIB (Canadian National Institute for the Blind) で行なわれる、スタッフ トレーニング コースに出席する為であったが、その途中イギリスに立ち寄りRNIB (Royal National Institute for the Blind)を中心としたさまざまな施設を見学する事にした。しかしこれら全ての事をここに書き表わすことも困難であるし、すでに他の報告書で御存知の方々も多いと思うので、特に今回は全盲である私が肌で感じた事を中心に述べて行きたいと思う。なお最初の訪問地であるイギリスには10日間程個人的に私の家内も同行し、その後は全く1人で旅を続けることになった。

### ●イギリスでの印象

イギリスのヒースロー空港に到着したのは夜9時をまわっていた。あらかじめ岩橋理事長を通じてRNIBと連絡を取り、スケジュールの打ち合わせも大体終っていたので、「多分誰か迎えに来てくれているだろう。」と家内と話していた。しかし空港での手続きを終了しても誰も我々に声をかけてくれる人もいない。「仕方がない。行こう。」と声をかけたものの大きな荷物をかかえタクシー乗場も長い行列では心細いがぎりであった。一応ホテルカードを持っていたので、その住所を頼りに、慣れない英語で尋ねながら地下鉄を乗りかえ、ロンドン市内のホテルに到着したのは12時をまわっていた。そのホテルも昔の学生のためのアパートを思わせる様ながっかりとはしているが古い建物で、イギリスに着いた早々虚しい気持になってしまった。きっと誰かが迎えに来てくれるだろうと勝手な考えを巡らしていた私が甘かったのか……。

翌日はたった1日しかない自由な日である。「折角イギリスまで来たのだからどこか観光でもしよう。」と中心街に出て観光バスを探した。なかなか見つけられず何回ともなく通行人や店の人に尋ねながら探し当てた。尋ねれば非常に親切に分かり易く説明をしてくれるし、時には私の携帯している白杖に気付き途中まで案内してくれる人もあった。中には「連れて行ってあげたいが反対方向なので…………。」と云っ

て立ち去る人もいた。又人ごみで「恐れています……。」と云えば数人の人が「何でしょう。」と応えてくれる。その時私はふと『イギリス人の国民性』というものを感じた。日本で人ごみの中で「恐れています……。」と云っても殆どの人が聞えていても「誰かが援助してあげるだろう。」と人まかせ、或は手を出すのが恥かしいと思ってか反応が無い時が多い。又私はしばしば日本で「欧米では障害者を見かけると必ず『何か援助しましょうか。』と声がかかる。」と聞いていたが、決してその様な事はない。唯こちらから援助を依頼したり尋ねたりすると気軽に非常に親しみ深く援助してくれるのである。助けて欲しければ自ら援助を依頼せよ。障害者だからと云って他人の援助を待つのではなく、積極的に頼めばよいというまさに社会福祉でいう『主体性の原則』である。だからこそイギリスのヒースロー空港に到着した時に誰も迎えには来なかったのだと初めて理解出来た。風土、気候も日本と類似しているイギリスではあるが、これ程違うのかと考えさせられた。

この社会状況、特に障害者への理解、思いやりがあるからこそどの様な重度の障害者でも外に出よう、社会参加しようという意欲にかり立てられて行くのであろう。

それからの私達はガイドも通訳も無くあらゆるものを積極的に活用しスケジュールをこなしていく。

#### ●サンシャインホーム（視覚障害児のための保育園）

私が予備知識として持っていたサンシャインホームとは、就学前の視覚障害児を対象に一般学校への入学を目指し教育訓練をしている所であると考えていた。しかし実際にはそうではなく、現在では視覚障害を持つ重複障害児を主たる対象としていた。一般的視覚障害児は家の近くの幼稚園や保育園に通園し、何らかの事情例えば重複障害、点字のみを学ぶ、問題家族の視覚障害児を通園又は収容させ指導している。ここでは午前中はあらゆる自然の教材（動物、植物など）を活用しての経験学習、午後は屋外での遊びを通じての適応訓練を行ない基本的な生活技能を身につけさせようとしていた。この様な状況をつぶさにした私は彼らにとていかにこの様な基本的な訓練が必要であるかを再認識させられた。指導員も無理矢理教え込もうとはしない。子供の自発的な行動が出て来るまで辛抱強く待ち続け、それがアブノーマルな行動である時には矯正して行く。すでにこの時期から自主性を尊重しているのである。所長との話の中で統合教育について次の様な事も力説していた。

「統合教育を推進していく時に決して忘れてはならない事は、各視覚障害児には全く異った性格と能力及び家庭環境がある。これらの事を考慮しないでむやみに統合教育を推進するのは危険である。最も大切な事はその障害児自身及びその両親が

どの様に考えどうしたいのかという事である。さらに我々良き理解者（専門家）は彼等の決定した方針をどの様に保障してゆくか、例えば統合教育を受けたいという障害児とその両親に対して受け入れてくれる学校と体制を提供出来る様な努力をしていかなければならないのである。」

#### ●必ず必要な授産所

イギリスの授産所はそれぞれ国、地方自治体、及び民間社会福祉団体によって設立運営されている。中でもレンブロイ公社は国営のものとして広く世界に知られている。むろんバイオニア的立場であったのは私立のもので1850年代に多く設立されたが、現在では多大な公共的援助が受けられるようになって来た。どの様な経営主体の授産所であっても SEPACS (Sheltered Employment Procurement and Consultancy Services) という国の機関が側面的にあらゆる面にわたり援助し統制している。アメリカと異なり授産所制作品を公共機関が買い上げる制度がないため、SEPACSは公共機関やスーパー・マーケット、一般市場へ優先的に買い上げてくれるように調整していくのである。又 SEPACSは授産所で働く人々の労働条件を監督し、不等な差別などの問題が生じないようにしていくのも重要な責務である。

授産科目はそれぞれの授産所によって異なるが、視覚障害者が多く就業している授産所では次の様な科目があった。簡単な科目としては各種カードの袋詰め、化粧品や洗剤などのびん詰め、及び箱詰め、中程度の科目としては各種のブラシやマット作り、洋裁、高度な技能が要求される科目としてはベッド、その他の家具作りなどがあった。各科目的作業の中には視覚障害者であるために不可能な部分もあり、その作業だけは他の障害者或は健常者が行う事もある。しかしその様な場合であっても賃金は同一基準によって支払われている。

授産所で就業している人達は殆ど中高年令者や重複障害者である。話は本筋である授産所の事から逸れるが、授産所で働く重複障害者はここに来る迄にどの様な指導を受けて来たのかを若干述べておきたい。

私は二日間かけてロンドンから汽車で3時間程離れたシュリューズヴァリーにあるコンドバーホール学校を見学する事が出来た。RNIBが運営している重複障害児のための学校の一つである。寄宿舎ではファミリーユニットシステムを採用し、3LDKに9名の生徒児童、それに3名の指導員（内1名は昼間の授業の助手をつとめる）を配置し、日常生活の自立を目指し徹底した指導を行なっていた。一方昼間の授業も小中等部では基礎訓練と経験学習、高等部では授産所を考慮した職業前訓練と一貫した指導がなされていた。

さて話を本筋に戻して、授産所で就業している人達は家族と共に住んでいる自宅や或はアパートを借りてそこから通勤している者もいるが、殆どは自治体や民間団体が運営しているホステルという宿舎に住み、通勤している。このホステルは日本で云う身障者の通勤寮のようなもので安価な費用で入居出来、介護人や給食サービスなどの援助も受けられる。中には結婚し、ホステルに住み授産所へ通勤している夫婦もあるようだ。

授産所の賃金は週2万5千円程度であるがその人の作業能率によって若干上乗せされる。物価は日本よりや・高い程度であるから何とか生活していく事は可能である。中には授産所から一般企業へ就職していく人もあるが、授産所の賃金で生活が維持出来ることから、高度な職業知識や技能を有している人であっても一般企業における障害者への心理的転換をきらい定年65才まで授産所で就業し続ける人が多い。定年を迎えた人は授産所をやめ生活保護を受給しながらホステルに住み、レクリエーション活動を楽しみながら余生を送るのである。たまには定年前の人であっても生活保護を受給しながらホステルで生活している事もある。すなわち一般の企業で働くのか授産所へ入るのか、或は何もしないのかは本人次第なのである。ただ、一般企業などへ就職したければそれだけの職業知識と技能を持たなければ到底、就労は出来ない。これらの事がまさしくイギリスの視覚障害者に対する対策である。障害者は自らが進路を選択し、国はそれが可能になる様に制度を整えてゆく。それらを有効に活用するかしないかは本人次第なのである。

#### ●一般学校で教鞭を取る視覚障害教師

1974年の調査報告書によるとイギリスには全国で57名の視覚障害教師が一般学校に勤務していた。私は運良く、RNIBの紹介で2人の視覚障害教師に直接会い話を聞く事が出来た。内1人は弱視の男子で数学を担当し、他の1人は全盲の女子で盲導犬を利用して通勤し歴史を担当していた。

採用条件についてはほぼ日本と同一であるが、教員免許所持者は教員採用試験に合格しなければならない。同時に配属される学校に於てその学校の教師や児童、生徒の両親及び地方教育委員会の参観のもとで一定期間教育実習をし、承認されなければならない。この期間に視覚障害であるために問題を起したり、参観者に不安を感じさせては奉職する事が出来なくなってしまう。しかし反面この期間をうまく切り抜ける事が出来れば奉職後もPTAなどからの問題は出て来ない。一つの歯止めとして説得力を持つのである。この実習は視覚障害であろうとなかろうと実施されている。

視覚障害教師にとって最も大変な事は教科書作りである。特殊なカセットを利用し、ページも考慮しなければならない。絶えず何頁に何が書かれているかを熟知していく、いつでも生徒に指示出来なければならない。テストなどの採点は特定の同僚には頼まず、アルバイトを雇ったり家族の協力でやっていた。それは「特定の同僚に負担がかかり過ぎると人間関係がくずれるからだ。」と話していた。更に次の様な不満も漏らしていた。「最近やっと一般学校での視覚障害教師が増えて来たが、タイピストやコンピュータープログラマーの様な視覚障害者に定着した職種とはまだ云えない。一般社会の理解もまだ浅いためか視覚障害教師が配属される学校は移民の生徒が多いとか、問題地域の中にあるとか、或は障害児学級が併設されている学校が殆どである。一般的の考えとは逆に、ごく普通の学校で教鞭を取る方が視覚障害者にとってずっと楽なのに………。」と現状では満足していない様子がありありと伺えた。

文部省の一般学校に於ける視覚障害教師推進相談係のバーンズ博士は「一般学校における視覚障害教師の要件としては、第1に担当する教科のアカデミックな知識が充分であること、第2に充分な社会適応能力すなわち正眼者の中で自由に行動出来る生活技能を有していること、第3に円満な人間性であり同僚と充分なコミュニケーションをはかり自ら人間関係の調整が出来ることがあげられよう。」と述べていた。

実際に教鞭をとっている時には特殊な教材教具を使用しているでもなく、特に奇異な印象も受けなかった。日本に於ても意外に素ざるよりうむがやすしかも知れない。

#### ●希望に満ちていたトーキーリハビリテイションセンター

日本に帰る家内をヒースロー空港まで見送り、一人旅が始まった。トーキーはロンドンから南へ汽車で3時間程行った海、山に囲まれた美しい避暑地である。私は世界的に名の知られているトーキーリハビリテイションセンターで研修が出来る喜びとこれから本当に1人で旅を続けていけるのだろうかという不安の入り混じった興奮した状態であった。丁度汽車の中で昼食時を迎えたため、私は前に座っていた女性に「サンドウィッチとコーヒーを買いたいのですが、どこかに食堂車か売店がありますか？」と尋ねたところ、彼女は「ちょっと待っていて下さい。探して来ます。」と言い残し立ち去った。暫くたち彼女はサンドウィッチとコーヒーを買って来てくれた。私は代金を支払おうと「おいくらでしたか。」と尋ねると「よろしいです。どうぞ食べて下さい。」と言うのである。恵んでもらうのはたまないと数回押し問

答を繰り返したがとも角食べてからと思い食べ始めた。彼女が降りると話していた駅近くになり再びしつこく「やはり払わなければ気がすみません。」と言うと彼女は「分かりました。それではこうしましょう。私もきっと近いうちに日本に行くと思います。その時には必ず貴方にコーヒーとサンドウィッチを買って頂きます。い、ですね。」とやさしく言った。私はこれがイギリスのウィットかと思い「はい。喜んでそうさせてもらいましょう。」と応え、握手をして清々しい気持で別れた。イギリスでの素晴らしい想い出の一コまであった。

トーキーリハビリテーションセンター到着後、看護婦に宿舎内部を案内され驚かされた。内部はまるでお城である。昔、大資産家の別荘を譲り受けたそうだ。翌日には庭や訓練棟などを案内されその広さにも再度驚かされた。

このセンターでの訓練内容は対象を就業希望の視覚障害者に限っているため職能判定の意味あいの強いものであった。科目そのものは日本ライトハウス職業生活訓練センターで実施しているものと殆ど変りはなかった。全般的な特徴としては入所期間が3ヶ月程度であること、各種の職能判定や訓練科目は実際の作業を導入して行なっていること、さらに非常にシビアな評価をしている事などがあげられるであろう。仮に評価の結果、職業訓練が受けられそうもない訓練生に対しては、その訓練生の出身地にある職安の職業指導官や福祉事務所のソーシャルワーカーに連絡を取り、方針をたて直させ、希望によっては授産所に行く人もいる。又ごく少數の訓練生は直接就職して行く人もあるが、殆どは適性によって職業訓練校へ進む事になる。

毎晩のように訓練生達は近くのバブに通い楽しいひとときを送っていた。私も積極的に参加し、スコッチを飲みながら話し合った。素晴らしいことには彼等の殆どは未来に明るい希望を持っている。それは「必死にやろうと努力すれば、必ず援助してくれる人がいる。國も我々の希望を達成させようと各種の制度やセンターを準備してくれる。」と信じているからであった。「希望し目指している事が出来なくてもその時はその時点で次の方針を立てよう。」と意外に楽観的である。その様に考え事が出来るのもさすがイギリスの整った社会福祉の裏づけがあるからであろうか…。

#### ●巨大なCNIB

一週間のトーキーリハビリテーションセンターでの研修を終えてヒースロー空港まで戻り、カナダのトロントへ向った。すでに1人旅にも慣れたというものの全く知らないそれも異国での1人歩きは心細いものであった。しかしどんな時でも困ったら頼めば援助してくれるという安心感は私を勇気づけてくれた。最も私にとって

助かったのは各駅にインフォーメーションカウンターがあり、頼めば乗り替えなどの手続きをしてくれたり、又あらゆる所にいるポーターに荷物運びを頼むと同時に手引きを依頼し、複雑な場所での移動が意外にたやすく出来た事であった。多少奇妙な表現ではあるが少しのチップを渡すことによって申し訳ないという気があまり残らないものである。

こうして汽車からバス、飛行機からリムジンタクシーと無事乗り替え10数時間をしてトロント郊外にあるCNIB本部に到着した。

さてCNIBはカナダ唯一の視覚障害者のための組織である。職員は3千数百名もあり、視覚障害者としての登録から各種のリハビリテーション、図書館、盲老人ホームの運営に至るまで全てのサービスを視覚障害者に提供している。ただしその職員のうち約2千名は収益事業であるカフェテリアやギフトショップ、授産所の機能も備えている生産工場などで働いている従業員である。これらの事業はかっては視覚障害者にとっての欠く事の出来ない一職種であったが、現在では4百名程度の視覚障害者しか就業していない。しかしその収益はCNIBの大きな財源となっている。

CNIBはトロントに本部をおき、全土を8つのディヴィジョンという地域に分けそれぞれ中心となるオフィスをおいている。更に18のディストリクトという区域に分けそれぞれ支所をおきサービスを提供している。周知のごとくカナダは広大な国土であるため1つのディヴィジョンは日本の国土より広く、ディストリクトでさえ日本の各地方に相当する広さであるから、サービスを提供する方法も日本のものとは異なっている。所によって異なるがディストリクトの支所には専門職員、例えばアドミニストレーター（必ず配置されておりサービスや施設の運営管理を行なう人。）、リハビリテーションティーチャー、歩行訓練士、眼科サービス担当官、職業指導官、ソーシャルワーカーなどが配置され主に在宅サービスを提供している。これら専門職種として就労してゆくためには必ずCNIB本部が実施するスタッフトレーニングコースを受講しなければならない。私のカナダ行きの本来の目的はこの3週間コースに出席する事であった。

以上の様に全国に視覚障害のための組織が1つしかないという事は様々な施策及びサービスを提供する上で無駄のない効率的な、更にはそれらを強化する一つの要因と考えられるであろう。日本の様に多種多様な視覚障害者のための組織や機関が存在すると無駄が多い。すなわち重複したサービスの提供、ボランティアの無駄使い、経費の無駄、国や自治体への交渉の際の力の分散など効率の悪いものとな

ってしまう危険がある。反面CNIBの責任は重く、新たな様々なニーズに対応すべく、巨大な組織を確固たる方針と柔軟性ある運営法によって発展させて行かなければならない。

#### ●自由な訓練生

スタッフトレーニングコース参加中、私が宿泊していたのはA・V・ウェアセンターというCNIB本部に併設されているリハビリテーションセンターであった。ここでは視覚障害者に対する社会適応訓練や定期的に開校される職業訓練の他、CNIB職員のためのトレーニングコースも開校され、更には宿泊所の機能をも備えていた。

ロンドンから到着した日は旅と4時間以上の時差のためか非常に疲れていたので早く寝ようと11時頃床に就いた。しかし同じ階にあるラウンジからは賑やかな楽しそうな歌声が聞えて來るので、明日は休息日だからとおそるおそるラウンジに行ってみた。そこでは数人の男女がギターやハープを弾き鳴らし、ジンやラム酒を飲みながら騒いでいた。私はまず自己紹介をし、きっとこの人達も同じコースに参加するのであろうと尋ねてみた。すると1人は丁度その時期に開校されていたリハビリテーションティーチャー養成コースの参加者であったが、他の数名は何と中途失明者で社会適応訓練を受けに来ている訓練生であった。責任感と主体性、自主性を重んじていたイギリスのトーキーリハビリテーションセンターでさえ館内禁酒、門限、就寝時間などの規則があったのに、ここはそれらの規則は全く無いのである。そのかわり次に約束された時間や翌日の日程には決して遅れてはならない。さすが契約の社会であるだけにこの点はきっちりしている。自由であるだけに決して義務を怠ってはならない。この事はカナダ滞在中全ての面で感じさせられた。イギリス人より更にドライな国民性、自己主張をしなければ何事にも取り残されてしまう社会である。カナダは移民が多いためか差別意識には非常に敏感であり、視覚障害者の問題にしても同様である。単なる交渉で決着がつかなければ裁判に訴えても勝ち取ろうとする。仮りに訓練を受けた視覚障害者が就職したいにも拘らず出来ないのは社会の理解が無いためであると主張し、一見強引に進めて行く傾向が見られた。

自由な人達と3週間も生活を共にしたのであるから様々な経験を味わう事が出来た。時には夜中におなかがすいたと雪のちらつく零下10度という時に数名をひき連れ、ドーナツ屋に出掛けたこと、又或る時は訓練生数名とその家族と共にディスコに行き、ビールを飲みながら夜中まで踊りまくりセンターに戻ったところ、門が閉じられており警備員を起こし入れてもらったことなど、本当に楽しい想い出であった。

感心させられたのはどの様な訓練コースが開校されていてもその期間中殆ど毎日のようにレクリエーションプログラムが組まれていたことであった。勿論参加する、しないは個人の自由であるが、気ままに騒いだりレクリエーション活動に参加することはとかくストレスの溜りがちな視覚障害者にとって最も必要な事であり、ストレス解消と同時に一般社会にとけこむ手段ともなるのである。失明しても先ず楽しみから回復しよう。どんな時でもゆとりのある人間性を維持させようとしている。

#### ●職業及び職業訓練の状況

広大な国土のわりに人口が少ないカナダに於ては視覚障害者も当然少なく、3万数千人である。しかもその約半数は高年令者であるといわれている。その高年令者の殆どは盲老人ホームや家庭で年金や生活保護を受給し生活しているため、職業訓練対象の視覚障害者が少なく、散在していることから常設の職業訓練コースは少ない。それはA・V・ウェアセンターで定期的に開校されるディクタ=タイピスト(テープを聞きながらタイピングし、多くは秘書として就労する。)養成コースや所得税相談員(公務員として税務署に勤務し電話により市民からの税務相談を受ける。)養成コース、CNIBのVRA(Vocational Rehabilitative Activities)センターという授産所の一部で実施している機械工養成コース、マニトバ大学のコンピュータープログラマー養成コース(CNIBとの協力によって設立された)などが開校されているだけである。しかしCNIBの方針としては出来るかぎり一般に開校されている職業訓練コースに視覚障害者を参加させようとしている。それは経済的理由すなわち特別な職業訓練コースを設置するためには経費がかかり過ぎるという理由があるにせよ、積極的な理由としては視覚障害者を正眼者の中に統合させていくという統合思想に基くものである。尚雇用斡旋やフォローアップに於ては専門的な指導、援助が必要となるためCNIBは全国に23名の職業指導官を配置しサービスを提供している。以上の他、例えば単純反複作業を中心とする職種、例えばレンタルゲンフィルムの現象士や味覚による食品検査員などについては職場適応訓練の形態で訓練が実施されている。特に新職業としての開拓的職種の訓練についてはこの方法を活用し、より高度な専門知識や技術が要求される職種の職業訓練については一時的に訓練コースを開校している。いわば必要即応の情況に合わせ無駄の無い合理的な方法を試みている。

単純作業の職種を含めれば確かに職種が多種多様と言えるかも知れない。しかし日本とは異なった就労形態、例えばパートタイムの就労でも充分職業として成り立つことなどから考えれば一概に是非を検討する事は出来ないであろう。ただ、日本

とは異なり業務そのものの範囲が明確に規定されている事は視覚障害者の就労を促進させて行くためにはかなり有利な条件であると言えよう。更に一般企業への就職の際、視覚障害者を雇用するために業務内容の再編成を行なわせるだけの社会的な素地と理解がある事も見逃せない事実である。例えばいくつかの職種から視覚障害者が出来る業務だけを抽出し、それを一つの職種として成り立てる事も可能な事である。その様な事が許される社会環境があるからこそ自由に生きようとしているのであり、更にもっと良い社会環境を自ら作るために主体的、ヴァイタリティー溢れる行動をし続けているのであろう。

#### ●目新しい補助具

その一つはクルツビルリーディングマシーンである。これはコンピューターを利用し活字で書かれたものを声を出して読むことが出来る機械である。コンピューターを内蔵した本体は小さな机程度の大きさであり、他に読みたいものをうつ伏せに乗せるガラスで出来た読み取り部分と操作ボタンのあるコントロールボックスから出来ている。操作ボタンを操作することによって本の頁や指定した行を読ませたり、分らない単語の綴を繰り返させたりする事が出来る。音声はコンピューター独特の合成語であるが、私にも理解出来る明瞭な発音であった。現在のところ価格は7百万円以上するが、市場が拡大すればいずれ高くなるという事であった。この機械はむろん現段階では英語しか読みこなせないが、試みにローマ字で日本語をタイピングし読ませてみたところ明瞭な日本語の発音で読むことが出来た。世界にも数台しか無いこの機械ではあるが視覚障害者の情報収集にとって活期的な補助具であると言えるであろう。

次にレーザーケーンであるがこれは既に世界で80本程度は使用されている。しかしその殆どはアメリカ、イギリス、カナダであり、日本にはまだ一本も持ち込まれてはいない。形状は殆ど一般的な白杖とかわらない。グリップにあたる所に充電用のバッテリーが内蔵されており一晩の充電によって7・8時間は使用可能である。上端から55センチ分が機械部分にあたり、下端はグラスファイバーで作られており様々なサイズのものが取りつけられる様にねじ止めになっている。

この上部の継ぎ目に近い所に縦に3つの穴があり、レーザー光線を出し前方の障害物や段差を探知し音に変換して知らせる。すなわち頭上に障害物がある時は高音、前方では中音、下方に段差を探知した時は低音のブザーが鳴る。又グリップの外側すなわち杖を握った時の人さし指の先に当たる部分には2本のピンが突出する小さな穴があり、ブザーに対応し上、下、前方に障害物を探知した時は両者のピンが突

出し震動する。これは音を消し、人ごみでもピン表示だけで効力が發揮出来る様になっているのと同時に、盲聾者の歩行補助具としても効果的なものとしている。価格は70万円程度であり対象は杖による歩行訓練を修了した視覚障害者で更に数週間の特殊な訓練が必要である。これらの他多種の補助具を見る事が出来たがそれらの殆どは日本で既に紹介されたものや研究されているものであった。ただしイギリスでも同様であったが就学上或は就労上必要と認められた補助具については何らかの法的な援助によって視覚障害者は殆ど無料で購入する事が出来る。

#### ●結論にかえて

社会福祉政策の整ったイギリスにおいて視覚障害者のための対策は確かに秀でたものが感じられた。それは単に視覚障害者の物理的な生存権を認めているというだけでなく、個人の主体性と自由（選択）に裏づけられた生きがいを保障しようとするものであった。例えば労働年令に達した障害者は何らかの職業的技能や技術、知識を習得し、（1）一般社会での就業を目指すか、（2）一般社会で受ける心理的軌跡を嫌うため或は技能が不充分なため授産所のような特定の条件下での就業を希望するか、（3）全く就労を考えずに生活保護を受給して生活するか等の内、いずれかの道を選択し自ら決定する事が出来る。ただし一般社会で就業しようとする視覚障害者は正眼者に匹敵する職能が要求されるため徹底した職能評価判定と教育、訓練を受け、能力開発がされなければならない。自主的にその教育訓練を希望した者に対する責任をもって充分な制度を整えようとしている。言い換ればある人がどの様な道を選ぼうともその人なりに最大限の能力を發揮出来る様な環境が整えられ個人の生きがいを重視した対策が取られようとしている。この様なイギリスの現状に於ける視覚障害者対策は完璧とは言えないまでも、その多様性は評価し得るものであった。

一方カナダに於ける視覚障害者対策はまだ未分化であり、イギリスの制度やアメリカのリハビリテーションの技術を取り入れようとしている段階である。その際に両国でした失敗を二度と繰り返さない様に慎重に検討し、カナダの現状に適用出来るよう改良している。確にカナダの視覚障害者は未来を見つめ自由に生きようとしているが、まだその対策はイギリスなどに較べやや遅れていた。しかし現在急速に進歩しつゝあり、近い将来世界的に高く評価される時が来るに違いないと確信している。それはあの合理的な組織運営、管理法は世界的にも類の無い優れたものであると評価出来るからである。

日本の視覚障害者のための援護措置やリハビリテーションなどを両国のそれと比

較した場合、内容的にはそれぞれ特に違いは感じられなかった。むしろ日本のものの方が優れているとさえ感じられるものもあった。しかし視覚障害者自身の意欲、すなわち「自ら何とかして行こうとする気持」と一般社会の人々の「受け入れようとする気持」は残念ながら日本は遅れている様に感じられる。それは文化、宗教、教育、国民性の相違だけで片付けられる問題ではない。国民一人一人の理解の上に成り立つものである。現在日本ではその問題を解決するために社会啓発や社会啓蒙、コミュニティーケアなどという視点に立って視覚障害者を含めた障害者対策を検討しているが、若干遅過ぎた感もある。

又もう一つの特徴としては視覚障害者対策の主な対象は単純な視覚障害者から重複障害者や全身病による視覚障害者へと転換しようとしていることである。日本もこの微候の兆は既に現われており更にきめ細かな対策が必要となるであろう。

私がトロントを去る頃は既に外には数10センチの雪が積もりあちこちからジングルベルの音楽が聞える時期であった。丸一日以上機内で過ごさなければならない空路で日本へ向い、到着する頃には旅の疲れよりも「やった！何とか一人で全ての日程を消化出来た。」という満足感と新たな自信に溢れた気持で一杯であった。